

# 経営と健康



## 大河ドラマ 葛屋重三郎

(中)

講談師 一龍齋貞花

今年の大河ドラマ葛屋重三郎、写楽でも北斎でもない多くの絵師を見出した名プロデューサーが大河ドラマの主人公。

吉原で生れ、引手茶屋の養子となり、24歳の時、吉原大門前に書店耕書堂を開店、吉原細見(さいけん)を出版、吉原の風俗ガイドブックこれが大当り。

吉原から、花のお江戸の中心地日本橋へ進出を考えた重三郎。

日本橋の賑わいを描いた絵図が、三越前地下鉄通路に展示してある熙代(きだい)勝覧(しょうらん)、多くの人が通りすがりに目にします。むつかしい字ですが光り輝く、喜ぶという意味があり、200年前の日本橋の活気あふれる様子をご覧あれという意味でしょうね。

### 日本橋の流通経済

江戸っ子は宵越しの銭を持たないといわれまじ。火事が多く家財を貯えても焼けてしまう。使っちゃえという説もあるが、元手が無くても商いが出来たんです。

大正の大震災まで日本橋に魚河岸があり、おなじみ一心太助など天秤棒かついで朝一分を高利の一割で借りる。

四分で二両、一両10万円とすると、一分は2万5千円。利息1割は2千5百円、高利ですが保証人もなんにもいらず簡単に借りられ、

「おにいさん、さばいてよ」

「あいよ」てんで、その場でさばいてくれる。もとの一分に日歩利息が一割。2万5千円に2千5百円の利息を払い儲けた金で飲み喰いをする。翌朝又一

分借りて商いを。しっかり貯めた者は店を持つ。魚河岸は一日千両の売上げがありました。

日本橋は五街道の中心、多くの川があり海運によって全国の様々な物流があり、流通経済によって栄え今に続く老舗も創業2百年以上の店が多くあります。吉田松陰が処刑された伝馬町牢屋あと、石町時の鐘、134年続いている三ツ星のホテルありと歴史も一杯。日本橋や二石橋の上から富士山を眺める人が多く、

「これ以上乗つたら重みで橋が落ちる恐れがある通行禁止、見物の人はさつさと歩くように」と、通行制限もあったほど。

吉原関連本以外で安定的に売り上げに貢献したのが、当時人気の富本節の

テキストの出版。

書物問屋、地本問屋が軒を並べる日本橋。

「よし、ここで一番になってやろうじゃねえか」と、以来20数年風刺を込めた刺激的黄表紙を次々と出版。

洒落本の第一人者となった山東京伝もお抱えにしておりました。

### 十返舎一九の弥次喜多道中記

「お伊勢参りや、都見物にはえらい金が掛かる。行くたくても行けねえ。そこで旅に行った気分させるため、おい、一九さん道中記を面白、おかしく書きねえ、旅をした気分させるんだ、滑稽本にするんだ、楽しい挿し絵も入れる、原稿料もきちんと払ってあげるよ」  
「えっ、売れた分にに応じてじゃなく、

原稿料が頂けますんで有難うございませす」

耕書堂の食客十返舎一九は大喜び。これが日本最初の原稿料支払いです。

こうして生れたのが日本橋をスタートした弥次喜多道中記です。

後年の安藤広重の版画絵東海道五十三次も同じ旅の楽しさを描いたもの。

黄表紙本、浮世絵、錦絵

重三郎を支えたのが、一年四カ月耕書堂の従業員といってもお抱えの、黄表紙本の戯作者山東京伝。庶民向けの絵入り読み物が次々とヒット。

店が傾いた鱗形屋のお抱え朋誠堂喜三二と恋川春町を。自分の店のお抱えにしてどんだん黄表紙本を書かせる。「浮世絵にもつと力を注ごう、江戸名所が最たるもの、錦絵には絵師、摺り師、版木を彫る者と、いずれも腕のすぐれた者が三位一体とならなきゃいい作品は出来ない。しかし売り出すにはなんといつても絵描きだ。それには新進の絵師を売り出すことだ」

歌麿売り出す

喜多川歌麿は、茄子を詠んだ句に茄

子の絵を描くなど挿絵を描いていた。

「おい歌麿さんよ、これまで挿絵を多く描いているが、絵師として売り出さなんだ。鳥井清長が芸者などの絵姿を描いているが、姿よりも女性の顔、表情を描きねえ、きつと話題になるぜ」

「へい、それじゃ描いてみます」

花魁、芸者、水茶屋の女、はては町娘まで表情豊かに描かせ美人画の歌麿と大人気、商家の娘ありと、只今でいう美人コンテスト。歌麿の才能を見込んで多色刷りの豪華本。若者たちはその色気にぞくつとするほど。

東洲斎写楽をプロデュース

「写楽さん、役者の絵を描け、これまでの舞台姿絵とは違う役者の顔を大きく描くんだ、皆驚くぜ」

世間を驚かせてやろうと、重三郎は44歳の時、新進気鋭の東洲斎写楽の役者絵28枚を一挙に売り出す大胆な企画。いずれも大首絵、かっと目を見開き、大きな鼻、胸から上を大きく描いた浮世絵版画、何より人々が驚いたのが、役者の顔付きがためらいなく強調され

ていることでした。

市川蝦蔵、後の五代目団十郎の竹村定之進の大首絵は、大英博物館所蔵は勿論で度々目にされていると思います。二代目嵐龍蔵の石部金吉は手が小さく描かれ、大英博物館はじめホノルル美術館、ブルックリン美術館、シカゴ美術館、ウスター美術館、イェール大学博物館その他が所蔵し、絵をみれば見た見たと仰有るはず。三世大谷鬼次の奴江戸兵衛は重要文化財。

浮世絵太田記念美術館、城西大学美術館所蔵の岩井喜代太郎の絵は現在確認されているのがわずか3点。他にも3点、6点という作品、四代目岩井半四郎の恋女房染分手綱の重の井という女形や、肉筆も描いています。

他にも皆さん目にしていらつしやる写楽の作品は数知れません。それが大英博物館はじめ世界の美術館に所蔵されているんです。いかに素晴らしいか。その写楽を世に送り出したのが重三郎なんです。

数多く刷ったはずの本物の作品でさえ少ないんです、なんでも鑑定団に出したらいくら値がつくことでしょう。イヤつけられないかもしれません。

「相撲絵も面白いぜ、身体が大きいだけに画紙一杯に描くといい」

作品が成功するか否かは版元の企画力、才能ある絵師を見出し大々的に売り出していく版元の手腕でした。

浮世絵師として、重三郎が世に送り出したのが写楽と歌麿が双璧でした。

この二人によって浮世絵が、ヨーロッパでも注目されることになるのです。

「写楽、オレの企画で短期間に、150点以上の作品を描かせてしまった。このところ少し疲れているように見える。こらで姿をくらまさねえか」

「えっ、やめるんですか」

「心配するな、大首絵は大人気、次々と刷ってそこへお前が姿を消せば、いよいよ写楽とは誰だと一層話題になること間違いなし。売り切れたら刷る。売りが切れたとなると一層ほしくなるものだ。一回の刷りが250枚、それ以上は版木が駄目になってしまう。新しく版木を彫る。売れた分はきちんと払ってやる」

かくして写楽は姿を消し。そして重三郎を待ち受けているのは、最終章に入ります。ご期待下さい。